第六回口語詩句賞 選考会記録

選考委員 暮田真名（川柳人）

小島なお（歌人）

杉本真維子（詩人）

高橋修宏（俳人・詩人）

立花 開（歌人）

西躰かずよし（俳人）

林 桂（俳人）

龍 秀美（詩人）

司会 長島明夫（公益財団法人佐々木泰樹育英会）

開催日 二〇二五年三月八日

——今日お願いするタスクとしては、一次選考（佐々木泰樹育英会ホームページで選考結果・選評を公開）で挙げられた大賞候補六名のなかから、大賞一名を決定するというのが第一です。そしてそこで大賞に選ばれなかった五名は自動的に奨励賞になります。さらにこの人も奨励賞に加えるべきだという方が、もし奨励賞候補一〇名のうちにいれば、若干名追加をする、という流れになります。

事前にお伝えした通り、今日の記録は文字にして公開させていただく予定です。その際、雑誌の座談会であれば、よりよい読み物になるように必要な編集や加筆などもするのでしようが、今回は賞金も発生する公的な選考会であるため、編集は最小限にして、なるべくそのまま出すのが適切かと考えています。ご発言もそれを前提にいただければありがたいです。

実際の進め方ですが、今日は八名もの人数で、なおかつ様々なジャンルの作品を様々なジャンルの選考者が評価するという、口語詩句ならではの難しさも予想されます。臨機応変に進めていきたいと思いますが、ひとまず大賞候補として、さいうさんに三票が集まっているので、それを軸に始めるのがよいかと思われます。まずはさいうさんを大賞候補にされた三名に、あらためてその評価についてお話しただき、次いでそれ以外の方々に、さいうさんの作品をどう評価するか、それに対して自分が大賞に推す作者はこう評価する、というのを順番に話したいだけだと思います。

高橋修宏（大賞候補Ⅱさいう）

——ではまずお名前の順で高橋さんから。大賞候

補についてお願いします。

高橋 さいうさんに関しては選評で書いた通りですが、個人的に現代短歌は塚本邦雄（1920-2005）の辺りから読み始めて、最近だと藪内亮輔（1938-）や山田航（1933-）とか、いわゆる前衛系に分類されるものに触れてきたと思うんです。そこではある現代性みたいなものがあって、ヒリヒリとした抒情詩体があつてもこの痛ましい部分も含めて短歌に書かれている。くない。この方は、家族や好きな人であるとか、決して広くない自分の世界を自分で限定しています。その意味で、社会性や外部はあまりない。そういう自己限定された世界を詠んだものは、僕はこれまであまり評価してこなかったのですが、彼女の場合、その自己限定はたぶん自身の弱さであると同時に、無垢とまで言うと言い過ぎかもしれませんが、その私という地点から、新鮮な抒情の詩体が始まっている。

特に評価するのは、小さい弟や妹、ものごとを見る眼差しに、聖性みたいなものが立ち上がってくる。ところですね。自己限定して私的な短歌だけれども、そうであるが故に、ある尊さが不意に立ち上がってくる。その美しさと言うか、ホッとする感じかな。「まみどりのひかりに溺れながら往／＼理学部棟の床やわらかい」。これはシンプルと言うか、まったく凝った修辞や比喻はないですが、僕はたぶん自分の体験みたいなものと重なって、すごく個人的にいいなと思ってしまった。そういう見方って今まで自分のなかで忘れていたなど。だからことさら先鋭的というのではなくて、僕みたいな年齢の人間の、忘れてしまった何か、懐かしさと言うか、それを思い出

させてくれたのが、僕が彼女を推す大きな部分ですね。

林桂（大賞候補Ⅱさいう）

—— 続いて、林さん。同じくさいうさんについてお願いします。

林 高橋さんがほとんど言ってくれたので、付け加えることもそうなのですが、私たちの世代が俳句を書き始めた時、俳句のトップランナーは、金子兜太（1919-2018）や鈴木六林男（1919-2004）、佐藤鬼房（1919-2002）、高柳重信（1923-1983）、そういう人たちです。その時に短歌では、塚本邦雄や岡井隆（1928-2020）、さらに下の世代の春日井建（1938-2004）、佐佐木幸綱（1938-）とか、その辺りを読んできている。だから私もずっと前から短歌読者ではあって、むしろ純粋な読者としては、俳句を読むより短歌を読むほうが楽しかった記憶もあるんです。

そういういわゆる前衛の人たちを読んできたので、今でもその系列の短歌を読んであまりびっくりすることはないので、その後例えば俵万智（1962-）とか、ライトヴァース（日常の事物を題材とする軽妙な詩）と言われるような、社会性から私性にシフトする動きが短歌で起こった。でもそれはそこで終わってしまった気がするんです。で、このさいうさんも、私性に基づいて限定された世界を書いているには違いない。ただ、もうすこししたたかで、本当の私性とは違う、仮構された私性で世界を作っている。今回の口語詩句賞のように、一人の作者について、その作品すべてを見て選ぶという時には、一編一編がどうかだけではなくて、全体として作家性があるか、トータルの世界観が作れているか、そういう評価軸

が求められると思うのですが、さいうさんの短歌の世界はそれがあると感じました。

それと口語詩句の規定で五行に収めましょうという時、さいうさんは助詞だけが頭にあるとか、非常に独特な改行をしているんですね。短歌であつても単に二行で書くのではなく、五行のなかでの世界をどうやって広げるか。そういう意味では文体としても、口語詩句という枠組みを生かして書いていると言える。また、口語でも難しく固くなっていきがちなかで、平仮名書きやオノマトペを多用したりと砕いていく。意識的に砕いていくのが嫌味にはなっていない。ライトヴァースの俵万智みたいな、あそこまで行ったあとに帰ってこようとする、このさいうさんのような世界になるのかなと思います。

龍 秀美（大賞候補Ⅱさいう）

—— 続いて龍さんもさいうさんについて、お願いします。

龍 もうお二人がみんな言ってしまったので（笑）。私、選考委員になってからずっと、口語詩句とはなんだろうと考えているんです。毎月の評では、自分がその時に思った口語詩句とは何かをちよつとずつ書いているのですが、今度のさいうさんの作品は、口語詩句というものが形をとって現れた最初の到達点ではないかと思いました。彼女は短歌が基本になっていますが、日本の短歌は心情をストレートに表現できる器だと思えます。さいうは、その短歌のいいところと、現代文学としての美質を両方備えている。

すこし話がずれますが、神戸の大震災の時に私は九州にいまして、不謹慎とは思いますが、新聞を見て定点観測みたいなことをしていたんです。ああい

う大変な出来事があつた時に、各新聞の文芸欄に何が一番先に出てきたかと言うと、短歌だったんですよ。一週間も経たないうちに、震災の歌がだーっと出た。瓦礫からはい出て途端に歌ができたという人もいらつしやつてですね、すごいな短歌と思つたんです。で、俳句はなかなか出てこない。たぶんですね、俳句は現象の表面をさつとすくい取るとい形で、客観性がある。ということは、感情が熱している状態ではなかなかできにくい。ですから新聞に出るまで数ヶ月かかった。そしてもつとかがつたのが詩です。ただし、詩はその後、何年も続きました。しかも、それは詩集になって出てきました。ですから、そういう意味での形式的な特徴がある。そのことを、今度さいうさんの作品を見て思い出したんです。日本の短歌という一つの伝統のなかで、良質のものが出てきている。それを口語詩句としても、まず推したいと思いました。

西 躰かずよし（大賞候補Ⅱ長谷川柊香）

—— 西躰さんは大賞候補が長谷川柊香さんですが、奨励賞候補にさいうさんを選ばれています。さいうさんへの評価と、それを上回った長谷川さんへの評価をお聞かせください。

西 躰 はい。私は、さいうさんと長谷川さんで悩んだというのが実際です。さいうさんは、ここまでのお話にあつたように、口語詩句だからこそというところですね。この改行、例えば一文字だけで行替えというの、今まで短歌であまりこういう形を見たことがない。意識して短歌として詠んでいなくて、そういう意味で新しさを感じました。確かに自己限定の印象は強いですが、独自の世界観は感じられて、

その点も評価していました。さいうさんは一時期、一年ぐらいいびたつと投稿がなくなっていましたよね。初めに出てこられた時にすごい人だと思って、このまま続けていたら絶対に賞を獲れるだろうとお話していたのが、また洗練された形でカムバックしてきました。それは非常に嬉しいですね。

一方の長谷川さんは、独特の切実さを高く評価しました。作品の完成度にややばらつきはありますが、いいと思うものは群を抜いていい。お二人はぜんぜん違いますんで、なかなか比較しにくいですが、私としてはどちらの方も十分に大賞にふさわしいと考えています。

暮田真名(大賞候補Ⅱ奥井健太)

——では暮田さんにも、さいうさんの評価をお話しいただいた後、大賞候補の奥井さんについてお話しします。

暮田 川柳人の暮田と申します。今年から選考委員に加わらせていただきましたが、私はさいうさんは、まだ今年じゃないかなと思っています。まずモチーフの面で既視感があつて、妹や弟の聖性というのは短歌でわりとよく見る。妹で言うくと雪舟えま(1974)さんの「ゆゆ」や、盛田志保子(1971)さんにも有名な歌があります。表現面で言うと、特徴的な擬態語や、平仮名の多用でイノセントさを出すのも何人かの名前が浮かびます。私の同世代の歌人では初谷むい(1996)さんとか。

素晴らしいと思う作品もあつて、例えば「せつけんの泡／ほむほむ／と生みだして／神話のようなきみの手のひら」。この「ほむほむ」は、短歌の文脈だと穂村弘(1962)さんになると思うのですが、今の

短歌の枠組みを作った、現代短歌の祖であるという穂村さんのイメージと、神話というモチーフがうまく合致して、この擬態語には意味があると思いましたが。ただ全体的に、ちよつとずらした擬態語を使つてみたり、漢字の言葉を平仮名で書いてみたりという表現を多用しているのが、自己模倣に陥っている感じもある。力のある作者だとは思っているので、ちよつと今年はまだ早いという印象を持っています。

私の推した奥井さんは俳句ですね。私は川柳人ですが、川柳人が思う「俳句にはこうあつてほしい」という形と、俳人が思う「俳句にはこうあつてほしい」という形と、たぶんまったく違う。やはり私は観光客として俳句を楽しんでいるので、本当のことを言うと、俳句には俳句らしくあつてほしい。俳句の世界で最先端とされるものに私が反応できるかと言うと、ちよつと自信はないのですが、今回は俳句の賞ではなく口語詩句の賞なので、その前提で選考しました。

奥井さんは、考えることと書くことがすごく自然な形で一致しているなと思います。選評では「換算」という言葉で書きましたが、奥井さん独自のものの見方がすでにあり、それが無理のない形で俳句として出力されている。口語は、ハレとケで言うならケのほうで、普段遣いの言葉ですね。ハレの言葉である文語が「詩を書く私」を立ち上げるとしたら、口語は「日常生活を送る私」なのだとなんとなく思っています。かと言って生身の私そのものではない。言葉を使つて書くからには自分とべつたりくつてはいられない。その外部的な感覚も含め、奥井さんは俳句を自分の第二の脳みそのようにして書けていると思ひ、そういう点でも完成されているように

感じています。

それと川柳人として同じ五七五の俳句を見ていて思うのは、今この野菜が高くて買えないと言っている時代に、季節のものごとを書く難しさ。例えば冬になつても白菜が買えなかつたら白菜の句ができないという、そんな貧しい時代に俳句ってどうあるんだろうと思つていて：

高橋 俳句は貧しさを出すこともできますけどね。

暮田 ただ、「貧しさ」の質は時代によって異なりますよね。今の若者の感じている貧しさみたいなものが、奥井さんの俳句で書けていることがすごいと思つたんです。現実から遊離して季語の世界に遊ぶのではなくて、季語を用いながら、現実を生きるこの気分を俳句で表せていることに新鮮に驚いて、そういう意味でも推させていただきました。

立花開(大賞候補Ⅱ松下誠一)

——立花さんにも、さいうさんと大賞候補の松下さんについて、お話しします。

立花 さいうさん、私は奨学金選考のほうでは推したのですが、短歌として見た場合に、どうしても多用される平仮名の既視感に溺れてしまつて、読み手が作品の価値に届かなくなる瞬間がある。それがもつたいななと思ひました。前回までは自選の10作品で応募する形でしたが、今年からは期間を区切つて、すべての作品を私たちが読ませただくことになった。そうなるとその期間中の作者の変化も見てとれて、それはそれで面白かつたのですが、作者自身が現時点でどこを意図しているのかが見えづらくなつてしまう。作品の投稿数によって打率も変わってきますし、そのなかで平仮名があまりに多用

されているとなると、やはり作為というか、彼女の「作り方」が無垢さの向こうに見えてしまう。

「むーみんなのように／陽なたのあぜみちを／ぼちてぼちてと駆けるおとうと」。この「ぼちてぼちて」という音とか、オノマトペに対する思いも強いですね。自分でそれを新しく作る意欲も感じられる。そこは挑戦し続けたいと迫り着けない場所であり、彼女は到達しつつある。だから平仮名よりもオノマトペの対応に、私はいいなと思っています。ただ、現時点でそこに引つ張られすぎて、言葉の見た目にすぐく寄っている感じもする。やはり言葉の意味だとか、どこまで私なのかを考えた時に、まだ整っていない部分がある。このまま試行錯誤して伸ばしてほしいという思いで、賞のほうでは採らなかつたです。松下さんを大賞候補として推したのは、単に表現者としてだけでなく、作家としてもいけるのではないかと思つたことによりです。受賞者は、そこで一度世に出てしまえば、もう先に進むしかない。表現者のままで生きるほうが幸せな場合もあるので、作家として生きていける力、書き続けられる体力があると信じて、松下さんを推しました。

この方は、私性や自分の感情を表に出さずに、ものを使って自分を表現する時の、溶け込み方と云うのでしょうか、私という目に見えないものとこの世にあるものの輪郭がじわつと混ざっていくような感じがすごくいいですね。人間の体は脂っこいし、美しくない。その体がなければ私たちは存在することはできないけれども、その負荷も一生かかり続ける。そのことを自覚しながらも浄化する、そういうことを求めようとしている。

特にいいのが、生きる源である食べ物を使った「助

六にいなされるおなかもおなか」とか、「胎内にいちまい濡れるあぶらあげ」。例えば胎内にある油揚げ、複雑な皮膚みたいなのが、まったく存在しえない形で組み合わされているけれども、輪郭がじわつと溶け合つて意味が生まれる。花のシリーズも、花に投影して、自分の感情をむき出しにする。

奨励賞候補に挙げた絵巻さんは、打率的に言つたら一番高いかと思う方で、この方を推したい気持ちもすごくあつたんです。新しく口語詩句に参加された方ですが、安定感がある。

小島なお（大賞候補Ⅱ常田瑛子）

——小島さんの大賞候補は常田瑛子さんですが、今の松下さんも奨励賞候補にされています。皆さんの評価と、常田さんの評価、それと何かあれば松下さんについてもお願いします。

小島 どんどんテーマが増えて（笑）。皆さんのおっしゃること、本当にそうだなと思ひながら聞きました。さいうさんの作品はすでに言及されているように、モチーフや文体、レトリックの手つきに既視感があるという印象を持ちました。優れた作者であるのは皆さんに同意です。特に今、現代短歌は意味の時代で、三十一音のなかにたくさんの意味を、できるだけ比喩や隠喩を駆使しながら重層的に刷り込んでいく作者が多い。そのなかで、オノマトペを多用したり、表記を平仮名で開くという手法は、短歌の意味の重さから解放して、音や韻律のほうに開いていくあり方です。チャージングな音感、理屈を飛び越える純性は、さいうさんの一番評価したいところでした。

作品の印象を大きく左右するのは、私は名詞だと

思っているんですけども、さいうさんの名詞を引つ張ってみると、銀河・夏・風・光・溺れる…、非常に短歌好きの言葉群なんですね。短歌が大好物の言葉がたくさん、クッキーのお菓子箱みたいに詰め合わせにされている。キャッチーで美しい、たくさんの「いいね」が集まる作品だと思うのですが、もう一步、現代を生きるということに立脚した作者性、個性が欲しいと感じます。

私が大賞候補の常田さんを一番に推したのは、その社会性という点です。「金木犀が燃え盛り／横顔を知らない人の日記を読んだ」。選評に自分なりの鑑賞を書いていますが、これは誰の日記か。もちろん詩ですから限定することはできないものの、例えばこれがアンネ・フランクの日記だとしたら、その横顔を私たちは知らない。横顔を知らない人の日記というのは、たぶんもうこの世にいない人、会うことの叶わない人の日記だろうと想像しました。本来誰にも読まれるはずのなかつた言葉を盗み読んで、その後の世界、現代はどんなふうに変わつて、あの日記の教訓を私たちはどのように引き受けたかということ、この作品は問うているのだと思ひました。

もうひとつ、「土砂降りて逃げ込む／野うさぎの穴は／養護教諭の美しい耳」。養護教諭は通常の教科の先生と違って、生徒たちに評定や評価を行わない存在として学校に在籍しています。そういう人の耳が、生徒の心身の声に耳を傾けるために存在する。野うさぎは学校という組織のなかに生きる生徒たちの比喩だと思うのですが、野うさぎはかつて狩猟対象でありましたから、穴に逃げ込むことで一時避難できることを本能的に知っている。書いてある一語一語はクリアですが、深読みをととても誘う。そしてその

深読みの先で、現代や社会みたいな大きなものに濃厚に接続しているのではないか、そこに一票を投じました。

松下さんもかなり高く評価しています。先ほどの名詞の話で言うと、松下さんは名詞がとても個性的ですね。短歌好きする名詞をあえて避けているところがある。彼は俳句もやっているし、短歌の作者でもあるんですね。だからたぶんその辺りをよく知っていて、感傷ゾーンを巧妙に避けながら、ある抒情を出す。松下さんが不思議なのは、俳句を見ても分かる通り、意外にクラシックな部分がある。さつき立花さんが、植物を利用して自分の内心を表出するという話をされましたが、植物は季語に紐付けられるので俳句的になったり、短歌ももともとは景十心、花鳥風月を詠っていましたから、植物がクラシックな懐かしさを漂わせる。それでも巧妙に「好まれる俳句性」や「好まれる短歌性」を避けて、自分の世界を作っている。「生きたまま雪を歩けるふしあわせ」。雪なんて本当に好まれる素材ですが、その他の部分でちよつとずらしてくる感じなんですね。

杉本真維子（大賞候補Ⅱ大嶋碧月）

——では最後に、杉本さんは大賞候補が大嶋さんですが、小島さんが推す常田さんを奨励賞候補に挙げられています。またすこし多くなりますが、さいうさんと大嶋さんについて、それと常田さんについても何かありましたら。

杉本 分かりました。まずさいうさんですが、例えば高橋さんが挙げた「まみどりのひかりに溺れながら往／＼理学部棟の床やわらかい」、これも素晴らしいと思いますし、龍さんが選ばれた作品もみんないい

ですね。「振り払うための／＼かたちを保てない／波浪のような にんげんのうで」。この辺はオノマトペを使っている時とまた違う雰囲気が出ていて、私はこちらのシャープな感じのほうが好きなんです。

私はさいうさんのオノマトペの使い方がすこし気になります。短歌のかたの受け止め方は分からないですが、詩の書き手として考えると、例えば「にやふ、にやふと／ふたつ咳き込む友の手に／あぶらつやめくゲルニカの模写」の「にやふ、にやふ」とかで、本当にこの音で意味があるのかなと。読者の反応を気にされているところがすこし透けて見えてしまうと言うのかな。もっと自由に書いていいと思います。

先ほどのお話の通り、さいうさんは一時期投稿をお止めになって、もう今ここで応募すればほぼ間違いないく何らかの賞になるはずという時に出さなかったことがあったんですね。だからかなりの意志を持って書かれているとは思うので、もう一回ぐらい脱皮があるのではないか。素晴らしいことは間違いないと思います。そんなところで今回は選びませんでした。

私が選んだ大嶋さんは、この過激さに引つ張られそうになるのですが、公平な眼差しと世界観を持っていて、けっこう正統派の書き手だなと思います。性器とか、そういう言葉がよく出てきますが、この性器という、あらゆる属性を剥ぎ取ったむき出しのものをモチーフにして、男女だけでなく、人間、動物、さらには物質に至るまで、すべて等価なものとして見つめている。「いつ啞となるかも知れず銃の鉄」には啞という差別用語が含まれます。しかし公平な眼差しで世界と向き合うとしたら、それは避けよう

がないことなので、そこにも正面から踏み込んで、切実な問題意識と責任が感じられました。中途半端な気持ちで書いているものは、やはり読めば分かる。その重い社会問題に挑んでいるところを高く評価したいと思いました。

性の問題ですが、これまで女性性というのは、どこか一方的に男性に客体化されてきたところがある。しかし大嶋さんの場合は、逆にこの男性性が、時に晒し上げられるまでに、徹底的に客体化されている。客体化だけで止まっていると、ただやり返しているだけ、報復に過ぎないことにもなるところ、ユーモアに転じるまで突き詰めている。過激ではあるのですが、見えない暴力を公平に暴いていくような印象を受けました。さらにはどこか生の無効化というところまで夢見ている雰囲気があって、非常に豊かで広い社会批評性を持っていると思いました。

技術的にもたくさんの書法を備えています。「シャンプーの／テスターを嗅ぐ／（政治家は）／サボンのかおり／（どこの棚かな）」。同時多発的に色んな亀裂が入ってきて、複数の声があちこちから入ってくる、その表記の鋭敏な使い分けやこだわり。

教わったことも

も無く焚き 無

と む。火 け

こ こかを れ

ういとるえ教ば

これは視覚詩、ビジュアル・ポエムで、一行目はそのまま「教わったことも」と読むのだけど、そのあとは左回りで「無ければ／教えるという／ことも／無く焚き／火を／かこむ／」と。

繊細に人を傷つけないように書いていると思った

のが、「俺はまだ／鼠としては二流だが、／人間としては高専卒だ。」この二流というところ、もしここが一流であったら、高専卒と鼠が意味的に近づいて人を傷つけるかもしれません、二流にずらして回避させようとしている。

それと物質への眼差しとして、「離陸って／飛行機が生まれる前は／無かった言葉？／あの心臓も？」ここでは飛行機という物質にも心臓というものを見ている気がして、人間中心主義ではない、人間だけにこだわらない眼差しを感じました。

大嶋さんと常田さんは最後まで非常に迷ったんです。先ほど小島さんが常田さんの社会性を評価されて、皆さんの意見を聞いていると私も自分の意見に自信がなくなってくるのですが（笑）。常田さんの作品はとても美しい。そして死をテーマにした作品がたいへん多い。美と死は一体化したもので、そこはよいとしても、死を扱っているが美のほうにかなり寄っていて、美しいまま終わるような気がする。読んだあと、美しさでぼーっとするような、酔わせるような感じはあっても、欲を言えばもう少し批評性がほしいなど。そんなことで、とてもいいのは分かるのですが、今回は大嶋さんのほうを選びました。

松下さんは、私はすごく面白いと思っていて、最初の頃、かなり積極的に採っています。ただ、最初の頃に採り過ぎたと言うか。これは私のほうの問題かもしれないが、ある種のパターンのようなものがすこし気になってきた。それで今回は選びませんでした、でもやっぱり読む時に笑わされたり、安定して色んなものを書いていける力がある人だと思っ

大嶋碧月の作品

林 大嶋さんのユーモアは、具体的にどの辺りに感じられますか？

杉本 例えば、ちよつと読み上げにくいですが、「陰茎を割れば紳士が住んでいて／コーヒー豆を挽いてたりする」。これ、笑っちゃいますね。

高橋 なんか『レイザーヘッド』(1977)とか、デイヴィッド・リンチ(1946-2026)の初期の作品みたいですね。細部を見ていくと、暖炉の上でダンスしているとか。ほとんど幻想なんです。

林 「鼠としては二流だが、／人間としては高専卒だ。」これは人間としては一流だということですか？ 高専卒を誇っているという文脈？

杉本 たぶん、すべてが意味に回収されない、きれないで残る部分がこの方の面白さかなと。

高橋 「人間としては高専卒だ」と言った時に、一流とか二流とかいう評価軸が無効化される。

林 私の世代では、高専卒ってエリートなんです。私の友人なんて学校代表で、お前は学年一番だから高専を受けてこいと言われた。とにかく高専ができた頃は、県に一つくらいしかなくて、大学よりも高専に行くほうがえらい。結局、高専を出ても短大卒資格しかないのが、頭打ちになって人気落ちました、実際その友人なんかも、それぞれ弁護士になったり、次の世界に行っても成功するような人たちなんです。

高橋 今林さんが言われた辺りのことも、たぶんこの作品は批評として含んでいます。

杉本 はい、含んでいると思いますね。決して高専卒を…

高橋 馬鹿にもしていないし、何流だと決めつけて

もない。高専卒の意味が社会でそんなふうに変わっていったことも包含する、そこが面白い。

林 でもこれ、鼠としては一流だと言ったなら、高専卒を相対化しているような気もしますが、鼠として二流だとうなかな。

杉本 いや、もしここが一流だと、鼠の一流が高専卒の下になって意味が固定化するから、一流だとよくない。

龍 だから両方等価なんです。等価と言うか、評価しない。

高橋 今まさに林さんが混乱したのを、作者は待っているわけですよ。価値基準を混乱させるんですね。

松下誠一作品

暮田 松下さんが俳句という話がありましたが、松下さんは川柳ですよ。

林 そうそう。私は松下さんはずっと俳句を書いてる人だと思っていました。そうしたら、彼の自己認識では俳句は五編しかなくて、川柳が九七編。私も松下さんをすごく採っていたのが、途中からぱったり採らなくなったのは、やはり俳句じゃなくて川柳を書き始めたから。私はずっと俳句のつもりで読んでいたから、すれ違った。で、途中から私がファンになったのは奥井さんなんです。二人の作はよく似ているんですが、俳句を書いている奥井さんのほうがびたつと来て、途中で松下ファンからシフトしたんです。

暮田 私は奥井さんを大賞に推していますが、林さんや杉本さんと意見は逆で、松下さんは後半から素晴らしくなっていたと思っ

大嶋碧月の作品2

ますか。小島さんがおっしゃったように、松下さんはクラシックなところもありますよね。花のモチーフを見つけたのがやっぱ発見で、花の題で書き出してからすごくよい。花を多用しながら、毎回ホームランを出しているような。ああいう一見俳句にも見えるスタンダードな抒情って、意外と現代川柳のなかではブルーオーシャンなので、松下さんは、私は川柳はすごく評価できます。それに比べると短歌がどうも…という感じですよ。

立花 そう、短歌になった途端に持ち味を失ってしまう。

暮田 川柳で見せてくれている打点を短歌でまだ見れていないかなと。

立花 短歌は私性、自分と離れることができない。その時に、おそらくまだ自分の核みたいなのがない。松下さんは自分の外にある、自分自身と距離を置くものを頼りにゼロから作り上げるのは得意だと思ってしまう、己のなかにあるものから何かを抽出するということに関してはまだ、川柳や俳句の精度までは至っていないと思います。

私も花のモチーフは松下さんにとって発見だと思います。花って本当にもう使われすぎて避けられるぐらいのものです。花から肉を連想させる、肉から花を見出すみたいな、花と対極的なものを置きながら、いかに両方を混ぜ合わせていくかがうまい。だから離れば離れるほど書けるのだと思います。先ほど龍さんが言われたように、やはり短歌は大震災の後すぐに出てくるぐらい、己の感情を吐き出すような側面がある。だけれども、客観性みたいなものを求めていくほうが、松下さんには合っているのかもしれない。

はないですか。もう喋れなくなってしまう状況が近づいている予感と、銃に鉄という取り合わせですか

ら、オーソドックスな作り方だと思います。

林 それで差別用語もクリアだと？

高橋 うん。僕もそれほど気にならなかったですね。龍 これは「啞」だから意味が出てくるのであって、「言葉の不自由な人」では、この感じは出てこない。

杉本 虐げられた人たちの押しつぶされた苦しき。さっきお話に出た性欲とか攻撃性とかも、何か張り詰めたテンションがあって、そのピンと張った切実

な糸が切れそうで切れない緊張感に、今も必ずどこかにあるけど見えにくい、声にならない苦しみとか、

そういうものが含まれていると思ひまして。切実な問題意識で使っていると思ひ、差別用語だから駄目

だとは考えなかったです。

林 他者に対してではなく、自己のイメージとして啞を使っている？

杉本 自分自身の、押しつぶされた苦しみ、悔しき。

林 「人の数だけ剣の術あり羅切」はどう読めるでしょうか。羅切は男性が宦官になる、要は去勢することですが、これも自己イメージかどうか。

杉本 うーん…

高橋 たぶん、剣のほうで羅切を批評するものであって、逆に羅切から剣が見返されているという感じかな。

立花 でも二つがあまりにくつつきすぎている。

高橋 ええ、剣と羅切が近いですね。

立花 この方、単語から切り込んでいく時にも、言葉の持つ意味と、あとエネルギー量と言うのでしょうか、差別用語なんかをポーズとして使う。でもそこから先の意図が見えてこない。だから読み手は、こ

ここにどんな意味が？と混乱する。作者には作者なり
のしつかりとした意味があつて作っているとは思
うのですが、やはり切り込む場所が：

龍 詩人はこういうの好きなんですよ(笑)。

高橋 読み手と響き合った時にはすごくいい。だ
け別の人には拒絶もされてしまう。

暮田 私も、大嶋さんは作品全体を見た時に、どう
しても露悪に流れているのが気になります。私が一番
素晴らしいと思つたのは、「離陸つて／飛行機が生ま
れる前は／無かつた言葉？／あの心臓も？」。見た時
にすごくびっくりして、こういう手垢にまみれてい
ない言葉を使って新しい詩を創造する意志があると
感じられるのは、本当に器の大きい詩人だと思つ
んです。でも本人にとって切実なはずのジェンダーの
問題とかを扱おうとすると、逆にどうしても記号的
になつてしまう。「陰茎を割れば紳士が住んでいて／
コーヒー豆を挽いたりする」も、コーヒー豆を挽
くというのが、男性向けライフスタイル雑誌のコー
ヒー特集のような感じで、まだ記号化された男性性
っぽい。そこがもつたいない。

高橋 そこは僕はユーモアだと思つたんですけどね。

暮田 それも分かるのですが。さっきの「二流の鼠」
のお話であつたように、言葉の意味を外して評価を
宙吊りにするみたいな方向性を指すのであれば、
まだ記号の力に頼っているふうに見える。

立花 分かります。共感します。

西躰 「声小さいから何回でもさよなら」とか、シン
ブルなのがいいですね。

立花 はい。それなのにどうしてこんなに力んで書
くのかなど。いや、すごく分かるんですけど、やは
りその力みをとらないと、賞を受賞した時に、それ

がその人が本当は向かえたであろう場所を閉ざして
しまうかもしれない危険がある。すごくいいものを
持つていらつしやるんですけどね。

性に關することは、本当はもつとユーモラスにし
たいのではないかという気がします。何がこの方
なかなで行き着いていない部分なのかは分からない
ですが、やっぱり露悪的な振舞いをしてる時より
も、ちよつとフツツとなるようなものに心が動かさ
れる。だからそちらでたまに性を出す。で、そこ
真逆の、自分のなかにある稚拙さや弱さ、力がふつ
と抜けた寂しさみたいなものを極めていつてもら
うと、ご自身でも書くことに対する見え方がとても大
きく変わるような気がします。

杉本 その力の抜けたよさも分かりますが、そうい
う作品だと他にいくらでもあると思うんですけどね。
露悪と言われるところについても、私はポーズには
感じられなかつたし、何か悪意を持つてということ
でもないと思う。言葉が鋭い、尖つてるところは
あるけれども。私は逆にそういうところがいいと思
つてですね。

高橋 悪意つて文学にとつては決して悪い言葉では
なくて、僕は投稿者のなかで、悪意というものを意
識的に持ち込もうとしている随一の人だと思います。
だから毎月の選考をしていてもやっぱり気になる方
で。

暮田 ちよつとコスプレみたいに見えるところがあ
るんです。「鼠としては二流だが、／人間としては高
専卒だ。」も、ブルーハーツの引用のように見える。
もうちよつと自分の声を見つけれられる気がするん
ですよね。

立花 そうですね。露悪に走るつて短歌ではけつこ

う多い。でも単語にあまりにも頼つて、露悪になる
と埋もれてしまう。これを極めていつてほしいとい
う気持ちも正直ありますけどね。だつて面白いです
し。「ポルノ売り歩いて西へ西へ西へ」の、逃げなが
らもどうしようもない自分の欲求みたいなものがす
ごくよくて。切実さを求めているのに、自分も意志
を超えた何かを被つて何者かになつてしまう。常に
どうしようもなさを抱えていて、そのどうしようも
なさを爆発させる方向がまだ定まつていない、その
不安定さ。

杉本 今すこし考えていましたが、おそらく短歌や
川柳、俳句と違って、詩の場合は口語自由詩で、型
がない。だから書く時に自分で型から作るわけ
です。と言つても、五七五みたいなリズムを考
えてからここに言葉を入れていくのではないので、フォルム
から作る時にはどうしてもこのぐらい強い型が必要
なんです。言葉を集めて、ちよつとやそつと
どこかを引つ張つても崩れないフォルムを作る。詩
人は一回一回その新しい型を作り、壊していく。で
すから口語詩句も、作品自体は短いですが、私は詩
だと考えて毎回読んでいますので、やっぱりこのフ
ォルムを考えながら採つていたのだなと気づかされ
ました。皆さんの選評を読むと、きつと個々のフ
ォルムを前提に読まれているわけではないと思
うんです。だとするとたぶん作品の印象もぜんぜん違
うだろうなと、勉強になりました。

高橋 僕の印象としては、この大嶋さんは、長い詩を
書いてほしいタイプですね。

杉本 あ、そうなんです。

高橋 長い詩のなかで、その生々しさやコスプレ感
がどんどん反転するようなスピード感とか、そうい

ったものが出てくる作者ではないか。短さはたぶん彼にとって決してプラスではない。

杉本 そうですね。やはりフォルムを作っていくために、あえて鎧を着ている。だからそういうコスプレ的な感じは、私は駄目とは思わないです。

常田瑛子の作品

林 小島さんが常田さんの「金木犀が燃え盛り／横顔を知らない人の日記を読んだ」を『アンネの日記』とおっしゃって。私もこの作品を採って批評しましたが（二〇二四年一〇月総評）、私がその時イメージしたのは、ネットで顔写真だけ出している人たちの日記。つまり非常に身近だけれども横顔を知らない、日常生活を知らない人の日記だろうと思って書いてんです。ことさら社会的なこととは思わず、現代によくあることだと。「金木犀が燃え盛り」、やはりこれがあるからこそその社会性でしょうか。

高橋 「金木犀が燃え盛り」は、不穏と言えば不穏な感じがありますね。

林 金木犀って普通は燃え盛らない花なんですよね。

立花 それは咲いている様子として？

林 そうです。

立花 燃え盛るといふ比喻は確かに読み手に委ねられる感じはしますが、私はわかりかすつと読めたんです。小さい花が密集して、何かの裂け目みたいに鮮やかで、火の色にも近い。でもその「燃え盛り」が日記とどう繋がっているのかは難しいところですね。林 だから私はこの「燃え盛り」が読めていなかったのかなと。

高橋 僕は「金木犀が燃え盛り」は決して実景の印象ではないと思う。燃え盛ると感じたというイメージ

であって、その次の「日記」に、ある種の匿名性と同時に実存性みたいなものを垣間見せる。だから小島さんの選評を読んで、『アンネの日記』という読みはすごいなと感心しました。

林 あと「土砂降りて逃げ込む／野うさぎの穴は／養護教諭の美しい耳」は、学校で弱い立場にある生徒の比喻だと。

小島 そう読むと、「逃げ込む」や「野うさぎ」のモチーフに必然性が出てくる気がして。

高橋 養護教諭はこのなかでキーワードだから、そこからイメージを辿ると、野うさぎはやっぱり生徒になってきますね。

林 確かに学校現場のなかで批評しない先生が二人いて、それは生徒たちの逃げ場なんですよね。一人が養護教諭で、あと一人は図書館司書。だから図書館に行くか、保健室に行くか。弱い子たちはそのどちらかに逃げ場がある。

龍 そうだと思います。台湾が父親の実家なので行くんですけど、墓場に野うさぎがびよんびよん跳んでいて、それがちっちゃくて可愛い。耳が普通のうさぎよりもちよつと短い。その小さな耳と、この養護教諭の耳も繋がってくる。

小島 学校は、生徒がその耳で先生の教えを聞くという場であるけれども、養護教諭は逆に生徒の声を聞く耳を持っている人であるということの比喻表現なのかなと解釈しました。

龍 だから色んなものが含まれていますね、この耳には。野うさぎもすぐ穴に潜りますし。すごくよくできている。

高橋 でも狩猟対象だった野うさぎが生徒というのは、辛辣な表現でもありますよね。

小島 そういうところに社会性を感じたという印象だったんです。

社会性という評価軸

林 評価のなかで、社会性という軸がずいぶん出てきていますね。

暮田 私が奥井さんを推したのも社会性と言うか、現代への批評を感じたというところがあります。皆さんの閉じこもっている感覚も、社会性がもうちよつとほしいとか、今回わりと出てくる単語ですね。

立花 我々の世代は社会に手放しで寄りかかれない。いつ裏切られるかという関係なので、やはり表現をする時の、己との向き合いにおいても、どうしても切れないものが出てくる。

高橋 社会性というものが外部の対象としてあるのではなくて、自分のなかの葛藤としてあるんですよね。自己に投影された外部。だから従来のように、外部に対して批評性を持つていこうという態度ではなくて、自分のなかにある違和感や痛みを解析していくなかで社会に向き合っていく。そういう厄介な手順を踏まないと、今はたぶん社会性が出てこない。僕なんかは世代的にそこまででもないですが。

龍 それは先生が幸せなんですよ。私なんか生まれた時から無国籍者だから、すつごい大変な人生。だから嫌でも自分に投影されてしまう。

立花 社会性という名前は一緒でも、世代によって見方が大きく変わりますね。私は、どう生き抜くか、どう生き続けるかみたいなのが本質になってきている時代なのかなと思います。養護教諭の耳に逃げ込まないと生きられない、生き続けることができな

い。だから社会との向き合い方も、苦しんでもどうしていいか分からない、そんなところから生まれる。社会というものに確かな手応えがなくても、社会性は常に背景に透けて見え、私たちを動かし続けるのかなと思います。

林 そういう社会であれば、さいうさんのように、逆に社会と向き合わないという選択もある。俳句の歴史で言うと、昭和三〇年代から四〇年代に社会性に向かう前衛の展開があったのが、その揺り戻しが来て、飯田龍太(1920-2007)や森澄雄(1919-2010)の、伝統的な有季定型の俳句観が主流になった。そうすると季語を使って俳句を書くこと自体が、社会と向き合わないという選択になる。難しいのは、下手に社会性に向き合いましたと言うと、俳句は素材主義で終わってしまう。こういう事象がありましたという、その事象を書くことに終始してしまう。

高橋 『現代俳句』(二〇二五年四月号)の昭和百年を記念した特集に、「現代俳句のハードコア」というタイトルの原稿を書いたんです。結局そこで挙げたのが、金子兜太の「暗黒や関東平野に火事一つ」とか、鈴木六林男の「暗闇の目玉濡らさず泳ぐなり」、あと渡辺白泉(1913-1986)の「地平より原爆に照らされたき日」。つまりぜんぶ無季なんですよね。近代俳句ではなく現代俳句と言った場合、自分がハードコアとして選ぶのは、むしろ無季であることが当然だったのだということ思い出した。でも林さんが言われたように、現実に今どんどん広がっている俳句はそうではない。

林 戦前の有季定型、花鳥諷詠という形式は、実は戦争とかそういう素材から逃れるためのものだった。それが戦後になって、思想信条を歌えないのは芸術

ではない、俳句なんて第二芸術だと言われた時に、戦争から帰ってきた若者たちがそれを克服しようとしたのが社会性俳句であり前衛俳句なんです。その流れはでも、昭和五〇年代ぐらいまでしか続かなかったですね。

奥井健太の作品

暮田 奥井さんの作品では戦争についても書かれていますね。やはり今の俳句の主流が、季語の世界に逃れるということだったとしたら、そのなかで肩肘を張らずに現実と向き合うということをしているのではないかと。

高橋 奥井さんの「浮寝鳥戦争に布使われて」、これは発見ですよ。読んだ時はびっくりしました。

林 これは私も採りました。

暮田 浮寝鳥は水上に鳥が寝ながら浮かんでいる状態ですよ。水面が布を連想させるような季語のイメージもありつつ、戦争に布が使われるという発見。俳句の賞を獲得するような、前衛的・挑戦的な俳句かと言うと、たぶんそうではなくて、わりとスタンダードな俳句だと思うのですが、でも今回は口語詩句という枠組みなので。口語自体も、たぶん俳句のなかだとマイノリティですよ。

高橋 「かな」とか「や」、季語を使わないということであれば、けっこうたくさんあるはずですよ。池田澄子(1938)さんの「じゃんけんで負けて蛭に生まれたの」とか、有季で口語も。

林 さつき名前が出た渡辺白泉に「繙帯を巻かれ巨大な兵となる」というのがあって、鉄でなく布で兵隊を書いた。奥井さんの布に、それをちよつと思いつきましたね。布で書けるのは、うん、すごいとは

思います。戦争の実態はこちらのほうにあると思う。西躰 この肩肘を張らずに書いているところは面白いですね。自然体と言うか。

林 「同僚にロボットがいる南風です」。この文体なんかすごく松下さんに似ている。

暮田 松下さんはポエジーを指す感じがありますが、奥井さんはもう一段現実を見ているのかなど。ガストに行ったら猫型のロボットが食事を運んでくるという現実。現代を俳句という形で描けている。

小島 「マクドナルドの空の壁紙水温む」はすごく好きな作品で、空という、詩歌で長く詠まれ続けてきた素材が、ここではマクドナルドの壁紙として、青空と雲が印刷されている。おそらく奥井さんの世代的には、遙かな天につながる空の神秘よりも、マクドナルドの壁紙の空のほうがずっとリアルだし、そちらのほうに親和性はある。水温むは、これも季語ですよ。そういうアナログな言葉を壁紙の空に付けてくる感覚は、よく分かる気がします。

暮田 なんかバーチャルなんですよね。水温むという自然界の現象があり、その水が蒸発して本当の雲になるはずなのに、この俳句のなかではマクドナルドの空になっている。その薄っぺらいバーチャルなものに回収されていく感覚が、ロボットとかにも通じる。自然の実感が持ちにくくなっている感じも表れているのだと思います。

小島 そちらのほうが正直ではありますよね。

高橋 季語を使いながら、現代の風景や現代の風俗のほうから季語を批評し返す。ちゃんと季語を入れているのも、ある面で言うと、その季語自体の批評になっている。自分たちの季語はこうなんだというね。それは僕も共感した部分です。

暮田 季語と自分の世界に閉じこもるのではなく、社会という第三項を立てることで、季語を新しくしていると言うか。

立花 今を書くって、実はすごく難しい。今の気配とか、今の時間にちゃんと生きたということを書くのは。だからマクドナルドとかヨッシーとか、私たちが見ている今を、ちゃんと持っているのは面白いと思います。己のなかにある社会性ではなく、今存在する社会性を持っている。

小島さんが採られた常田さんは、私、佳作でかなり採っているんです。現代短歌らしく、言葉が繋がっているように繋がってなくて、意味を深読みできる。ただ、すごくいい作品で打率はとても高いのですが、ぜんぶまとまって見ると、やはり手法が一緒で。上句と下句で違うことを言って化学反応に委ねるのが、たぶんこの方の好きなやり方なんです。

これは今の短歌ですごく多い。その手法が駄目というジャッジをするつもりはないですが、本当の芯がどこにあるのか分からないんですよ。めちゃくちゃいい作品を一首で書ける力がある。ただ、そこでは単語一つが派生させる何かとか、読み手が自ら作り出すポエジーみたいなものが求められる。でもやっぱり、作品は作品として自律して存在してほしい。存在できる力を持ってほしい。

で、暮田さんが選ばれた奥井さんも、その分からは、化学反応を求めるのは共通するけれども、どこか社会性みたいなものを理解している感じ、核をどこに置くかを理解している感じがします。やはり理解している力がある作品は心に残るんですね。恥ずかしながら、私は一作品だけ見た場合にけっこう読み落としていたものが多くあったと思うのです

が、こうしてまとめて見ると、奥井さんはいいですね。現時点で私は、松下さんか奥井さんか、と思っ
てしまいます。

高橋 僕がかつてコピーライティングに関わったところがあるので、もしかすると松下さんは八〇年代辺りのコピーをけっこう参照しているのではないかなど。糸井重里(1938)さんや仲畑貴志(1947)さんの表現が注目されていた時代ですね。結局コピーにはクライアントがいるわけで、ちよつと気の利いた言葉を考えればコピーになるというものではないから、僕はコピーライティングと詩歌はぜんぜん土俵が違うと思っ
ているのですが、でも松下さんの作品を見ていると、口語の使い方やその屈折が、八〇年代あるいは九〇年代のコピーの反響のような感じも
し
ない
ではない。

暮田 私は松下さんは、川柳的な文脈で言う
と、時実新子(1926-2007)の更新だと思っ
ています。時実新子も「菜の花菜の花子供でも産もうかな」とか、花の名前を使っ
て川柳を書くという
ことを
して
います。

モチーフが似ているから悪いという意味ではなく、すごくいいと思っ
て
います。時実新子がやった領域が今手つかずになっ
て
いるので、それは川柳でやったほうがよ
くて。ただ、口語という
のは今私たちが喋っ
ている最先端の言葉であるわけだから、二〇二四年の空気を切り取っ
るという
意味では、奥井さんに軍配が上
がるのかなと思っ
ます。

林 余計なことを言う
と、「マクドナルドの空の壁紙水温む」も
いいと思っ
ているのですが、私
なんかには坪内稔典(1941)のやっ
ていたことを彷彿と
させます。取り合
わせてやるとい
うのは、例えば「春の坂丸大ハムが泣いて
いる」や「朝潮がど
つと負け
ます曼珠

沙華」とかですね。だからこれもどことなく先が見えてしまっ
るところがある。

休憩

——長くなっ
てきたので一旦休憩
としまし
ようか。

小島 この後、ど
ういうふう
に決まっ
ていきますか？

林 いや、なか
なか決ま
る気配が
ないです
ね。

小島 紛糾して
いる感じ
。皆さんの
意見を聞
くと、な
るほどな
るほどと、
一日中話
せてしま
いそうで
楽しいん
ですけど。
ある程度
お尻の時
間を決め
て、そこ
に向かっ
ていくの
がいいで
しょうか。

立花 二時間
では絶対
に終わら
ないだろ
うと思っ
ていまし
た(笑)。

龍 やはり異
種格闘技
らしくな
りますね。

——でも八
人いらし
ても心配
していた
ような錯
綜はなく、
個々のテ
ーマで対
話は積み
重ねられ
ているよ
うな気が
します。

暮田 私は選
考会自体
が初めて
なので、
どうなる
のかと。

小島 最初の
選考会が
異種格闘
なのはす
ごくいい
です。い
つ
のまにか
暮田さん
が遅しい
最強の川
柳人にな
って
いて(笑)。

高橋 評論の
選考会の
ほうが進
めやすい
かもしれ
ませんね。
ロジカル
な議論に
なるので。

林 そうです
ね。話を
していると
テーマが
絞られて
きて、自
然と方向
性が出て
くる。作
品の選考
だとそ
うはなら
ない。

小島 ジャン
ルごとの
ロジック
も違っ
るので、
なか
なか。

立花 最終的
には何を
基準に決
めること
になるで
しょうか。
私が以前
やったの
は、結局
多数決に
なりま

した。それならば最初からやる意味があったのかという気もしたんですけど。

林 でも意見が割れたらそういうこともありますよ。

さいこの作品と社会性・批評性

——では五時までで最終的な結論を出すというところで、あと一時間、議論を進めていきたいと思えます。やはり一次選考で三票入っているさいこのさんが引き続き軸になるのだと思いますが、色々な意見が出たなかで、さいこのさんへの批判的見解が宙ぶらりんになっているようです。特に既視感という言葉が何人かの方から聞かれました。つまりさいこのさんのモチーフや表現が、現代の短歌によく見られるもの

だということですね。そのある種の現代的な印象は、さいこのさんが今の時代を切実に生きているからこそ自ずと同時代の他の作家とも似てくるのか、それとも現代の先行者の作品に共感し、それをよく読んで、いまだその影響下にあるということなのか。このオリジナリティの問題は、先程来お話に出ている社会性や批評性にも関わってくるように思えます。まずさいこのさんを推す方々に、この既視感についてのコメントをいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

林 それは難しい話ですね。既視感と言ってしまくと、俳句は俳句で、さっきの奥井さんだつて避けられない。単なる物真似ということではなく、やはり定型でちゃんと勉強してくると、何かしらの引用はあるんですね。

龍 詩でも必ず先人のものを受け継いでいますからね。

林 要はそれを自分のものにするかどうか。

杉本 一つ質問ですが、先ほどさいこのさんに、社会批評性がなくてもいいというふうなお話がありました。現代詩の分野は、やはり戦後詩から地続きで来ていますので、批評性がないというのは考えられないことなんです。「現代」が付かない「詩」ならば分かりませんが。例えば俳句や短歌は、社会批評性がなくてもいいというふうな評価の基準が、現代でもあるのでしょうか？

林 先ほど言ったように、俳句だと昭和五〇年代にはその息の根が止まった。今もテレビで俳句の講評なんかやっていますが、あれはみんな、俳句の既存の技術をどうやって用いるかという、それこそ社会性の典型的なことなんです。それで、あれをきっかけに俳句を始める人がけっこういる。それは俳句甲子園もそうです。私も地方大会の支援をしますが、あれも完全に、既存の俳句の技術批評。寺山修司（1935-1983）たちが高校生の時、自前で俳句組織を作って活動していた時は、批評性はあるんですね。つまりその当時は「何を書くか」という問題があったのが、今は「どう書くか」だけ。そういう意味では、若い人からお年寄りまで、今俳句は没社会性です。

高橋 さいこのさんに現代短歌としての既視感があるという指摘は、ちょっと僕自身が最近の短歌を読み込んでいないのでなんとも言えないですが、確かにさいこのさんは世界を自己限定しているとは思っています。弟、妹、あとびっくりしたのは顔も知らない父ですね、「顔も知らぬ／父の生家に向かうとき／わたしウオーターリリーのつるぎ」。これが虚構なのか実の話なのかはともかく、自分のすごく狭い世界に見える。ただ、そこで社会批評的に外部を対象化する

のではないとしても、自己限定した世界のなかに豊かなものを発見しようとする振る舞いは肯定したい。そこには決して批評性がないわけではなく、あると思うんです。

——すごく飛躍しますが、家族みたいな場を大事にしようと言ったのは、思想的には吉本隆明（1924-2012）なんですよ。社会でがんが頑張らなくても、マイホームパパでいいじゃないかと言った。すごく反論もあったのですが、当時吉本が言った家族というもの、今はもう崩れかかったり、色んな違う形になったりしている。でも、その家族に対する信憑みみたいなものをね、さいこのさんは一生懸命、もう一回顧みようとする感じがある。そのいじらしさとか、そこは僕は共感します。

林 吉本隆明は対幻想という概念を作ったんですね。個人幻想、共同幻想の間に対幻想を置く。要は戦前や戦中に、個人がそのまま国家の下請けのようにして国家と繋がっていたのを断ち切るために、家族としての対幻想を置いた。そのような社会構造を考える必要があると。

高橋さんが言われる通り、本当はさいこのさんになんか家族がいるかどうか分からない。だからそういうフィクションとしての可能性も含めて、直接社会的なことを書かなくても、ひよっとしたらもう今現在にはありえないかもしれない家族像を書くことが社会批評性になるというのは、彼女の場合あるように思う。彼女は時たま俳句を書くんですよ。無季ですが、すごくいいんですよ。「ぼっぶこーんのあかるさは孤独」、「まがたまとして終戦の日をねむる」、「花束を抱くとき樹木めくあばら」。俳句だより個人の内面に向かっている、これを読むと彼女にまったく

社会性や批評性がないとは言えない。だから選評では合わせ鏡にすると面白いと書いたんです。

高橋 俳句だと短歌にはないものが露呈していますね。

杉本 いちおう言っておきますと、私はさいうさんに批評性がないと言ったのではなくて、私は批評性あると思います。今日の議論のなかで、社会性に関して色んな言葉が出てきたので、他のジャンルでは社会性を見ないようなものも、賞を受けたり評価されたりしているのか確認しなかった。

林 いや、俳句だと本当に、そっちのほうじゃないと賞は獲れない。

高橋 角川俳句賞とかを見ていると、社会性や批評性が露呈したようなものは基本的に排除した上で、評価をされますよね。すごい作家だと思えますが、岩田奎（1989）という若い俳人が角川の賞を受けています。彼なんかすごく批評性を持っているはずなのだけど、俳句賞のなかでは、物の見方を変えたり構造化させたりというような色んな手を使いつつ、そこには社会性みたいなものは見事にないんですよ。ないように書いています。

杉本 ないように書いていくだけあるんですか？

高橋 いや、彼の作品全体にはあるのですが、賞の応募作にはないんです。だから句集になると、社会的なものも出てくる。そういう場所ごとの使い分けみたいなことを俳人自身がやっている場合もある。

龍 やはり短いからですね。それ一個で勝負しないといけないから、どうしても誤解されるものは避けますよね。

私は、さいうは社会性あると思うんですよ。例えば「振り払うための／かたちを保てない／波浪のよ

うな にんげんのうで」。これはもう社会性そのものです。運命的にその力は与えられていないわけですね、今の人間には。だからトランプにやられたり、イスラエルにやられたりする。もうそこに支点がなくなってしまったので、世界がこうなっている。それと、「さんずいの／ように／途切れたちんもくへ／きみは母音のといきをもらす」。これ、二〇二四年六月に五人の選者が取り上げているんです。しかも見方はそれぞれ違う。と言うことは、それだけ様々な読みを許すのだと。ですから、さいうに社会性が無いわけじゃないと、うん、思います。

選考委員の責任

——今の時点で皆さん、大賞候補はやはり最初に挙げた作者と変わらないでしょうか？

林 他の人の考え方もよく理解できましたが、でも選ぶ人間の責任で言えば、はい分かりましたとはなかなかならないと思う。

高橋 うん、変わらない。

——そうすると最終的には、五時の段階で多数決にならざるを得ないようですね。その前提で、この後の話を進めると。

龍 だから大事なはその批評。例えばさいうが決まったとする。その時に、しかしこの選考にはこういう問題点もあるということをはっきりさせるということ。しかも全員の意思として。それができればいいですね。

林 皆さんのお話を聞くと、さいうさんはまだあと一皮むける、つまり今はまだ早いという意見がありますね。でも、どうなのでしょう。一時期の休みはありますが、さいうは口語詩句ではかなり古いほう

ですよ。あと脱皮する方法もあって、あなたはまだよくなるからもうすこし待ちましようというのもあるし、逆に賞をあげて脱皮させるというのもある。それで大化けすることもあるかもしれない。

いずれにせよこの口語詩句から、後々ちゃんと日本の表現史に残るような書き手を何人か見つけないと、私たちは責任を果たせないような気がするんです。今だんだんそういうレベルの作品も集まっていますよね。ここから誰が化けても不思議はない。だからもしさいうさんを大賞に選ぶとしても、彼女の今後の課題についても、きちんとコメントをしておかないといけないと思いますね。

奥井健太の作品2

——最終的に多数決にする前提でこの後の話を進めるとしたら、ひとまずは少数派のほうのご意見を伺っておくべきかと思えます。どなたかいかがでしょうか。

暮田 既視感の話がありました。先行作品を踏まえているというのは、もちろんここに挙げられたものが消化されているか、あるいは表現の更新がされているかと考えると、やはりさいうさんはまだ未消化な感じがする。奥井さんも坪内稔典との類似が言われましたが、やはり先行作品を踏まえた上で表現を更新しているという意味で、さいうさんと奥井さんの既視感と同じではないと思うんですよ。

例えば奥井さんの「鳥帰る英語にすれば長くなり」は、さらっと書かれていて、それだけで面白くも読めますが、この「英語にする」というところ。私は今銭湯で働いているのですが、外国人の観光客の方が

たくさん来るので、英語で「銭湯には水着で入らないでください」と言ったりしないといけない。だから奥井さんの「英語にする」も、単なる面白で書いてあるわけではなく、今、日本のなかに日本語が母語ではない人が増えているという現状も含まれていると思うんです。軽く書いていますが、二〇二四年を生きたという証が奥井さんの作品には一番ある。特に、社会性を帯びたものが俳句の賞で評価されるにくいという現状があるのであればなお、口語詩句で評価することに意味があると思います。

林 「子供にも誹いのありカブトムシ」はどう読めますか？ 私はこういうのに既視感があるんです。

暮田 それも今戦争が起こっているという、最終的に国同士の争いまで含むイメージだと思います。これは最良の作品ではないと思いますが。

高橋 奥井さんは季語の取り合わせが見事な場合も多いのだけど、それによってなんとなく凡庸になってしまう感じもはない。例えば「燃えるものばかりの部屋を冬の蠅」は、冬の蠅ってけっこうよく使われるので、これだとあまり新鮮に見えてこない。「猫も人の言葉分らず実南天」、これも実南天で本当にいいのかなど。

龍 昔からあるイメージを使っているのが多いですね。

高橋 季語のほう突出するんですよ。だから俳句らしい俳句になるのだけど、そのことで逆に奥井さん自身は損をしているのではないかと。

龍 カブトムシではないものを選んだほうが成功するかもしれない。

高橋 「同僚にロボットがいる南風です」も、俳句を書いている側からすると、季語に奉仕している感じ

がします。上手なだけで、季語とそこで書かかれているものが違和感を呼び覚ましてぶつかり合うのではない。マクドナルドの「水温む」もすごくいいし、びたつとはまっているんですよ。でもこれを「水温む」という春の季語の新しい使い方として受け取ると、季語に奉仕してしまう。じゃあそれで本当に新しいかと言うと、ちよつと僕は肯けない感じがします。

龍 これは俳句ですか？ 川柳ですか？

林 奥井さん自身は俳句だと言っているでしょう。俳句が六六句で、川柳は一句も書いていない。

高橋 暮田さんが選んだなかではぜんぶ季語がありますよね。僕がこのなかで一番面白いと思ったのは、「本も食事と同じ机の花野です」。花野は草花が咲き乱れる秋の季語ですが、ここでは人の名前と曖昧になって、季語自体がちやかかれている感じがする。これはいいなと思いました。

林 花野って、もう現実にはほとんどありませんが、俳人の大好きな季語ですよ。だからそういう俳句の文脈を逸脱はしている。

暮田 そういった俳句の文脈とはまた別に、他ジャンルの人間が読むと面白い俳句というものがあったり、口語詩句で評価する価値があるのかなど。俳句の賞だつたら、季語の使い方と駄目と言われるかもしれないですが。

高橋 いや、季語の使い方上手なんです。上手なぶんだけ僕は不満で。「住んでもう大阪恋し熱帯魚」の華麗だけど。ペラペラした感じも、すごく季語の使い方うまい。

暮田 そのうまいのが、口語詩句として見た場合に

不満だと？

高橋 だから当たり前の俳句になっている。じゃあこれが、例えば現代俳句新人賞とかに出した場合は、そのなかで突き抜けるかと言ったら、たぶん突き抜けない。上手だよって言うところで終わってしまった感じがする。

暮田 題材として社会性が疎まれるという、さつきお話で言うとうまいでしょうか？

林 でもこれは、俳人は社会性があるとは読まないと思います。

高橋 そうですね。諧謔みたいな感じでね。

林 やっぱり季語を読んでいくから。

暮田 季語に依らない読み方を口語詩句ではできないのではないかと提案で。

高橋 うん、なるほどね。

杉本 日常を異化するという意味で、例えば「目覚めてもまだ風船は天井に」では、風船が天井にびたつといて、そこで時間も止まっている。日常にちよつと亀裂を入れることで日常的には見えないものを見るところというのは面白いと思うのですが、ただ、これが散文のなかの一行を抜き出したのとどう違うのか、という気もしますね。

高橋 確かにもしこれが俳句の賞に提出されたとしても、散文的だという批評が出てきそうですね。やはり季語をそれ以外の措辞が説明しているから、散文的な感じになる。「浮寝鳥戦争に布使われて」なんかは、季語とそれ以外に亀裂を感じるんですけどね。

大賞の決定

立花 発言してもよろしいですか。私も短歌だと採れないものが多かったんです。どうしても自分と同

じジャンルの作品は、既視感があつたりして、評価が厳しくなる。なおかつ暮田さんがおっしゃる二〇二四年ならではの作品とか口語詩句である意味というのを、たぶん皆さんそれぞれ別の形でお持ちになっている。だから自分のジャンルだと領けないという点とおそらくダブルで、議論がまとまらないのではないかと思います。

私はおさらいすると、俳句としてどうかという点よりも、暮田さんの言った社会性とか、今を書いているという点で、この奥井さんを今とても推したい気持ちがあります。それと小島さんが選んだ常田さんは、どうしても私自身の短歌というジャンルのフィルターを通して見ると、やはり作品としてはすごく狙っている。文字数が多いからこそ持たせられる含みや今の短歌の傾向に流れていかずに、自分が何を書きたいのか、どこに向かいたいのかを熟考していただきたい思いがあります。ただ、佳作はすごく多く採っています。

さいうさんは、やはり選考委員としての思いとして、選ばれたことによって潰れない人であってほしい。私たちが選んだことによって、書けなくなる、早かった、そういったところで苦しまないでほしい。それを強く思うので、あえて奨励賞に推したい。

林 いや、私は逆に、書き手のために脱皮させようとするなら、賞をあげるべきだと思う。

立花 おそらく受賞してもしばらく書ける方だと思うんです。力もある。私が所属している、まひる野という結社で、さいうさんと同じように家のなかのことを延々と書いている方がいて、すごくいいんですね。例えばペランダの窓から見える景色の移り変

わりを永遠に書ける。大きな揺さぶりがあれば書き手の成熟度に関係なく書けるのですが、変化がないものから変化を見つけるのはかなり難しい。でもさいうさんには、些細な機微、例えば置いてあるものがすこし動いた、これを詩的に書ける力がある。だけど、この口語とオノマトペと柔らかな平仮名でアプローチする書き方は、必ずどこかで詰まる。賞をもらえば脱皮できるかもしれない。だけど、詰まると思う。もちろん大丈夫かどうかは誰も分からないことではあるのですが、それが私は気になります。

——小島さんは、ここまでの話を踏まえていかがですか？

小島 困っています(笑)。皆さんのお話を聞いて、それぞれには納得するのですが、やっぱり常田さんを推したい気持ちなんですよね。でもそうやってそれぞれが意見を変えられないのであれば多数決になるとして、どういう結果になっても納得できるように気がしています。

——でも反対意見も言っていたら、記録としては残りますので。

小島 反対意見か……。もう言いましたが、さいうさんに反対したいというよりは、常田さんを推したいほうが強い。今は皆さんのおっしゃること一つ一つを咀嚼している状態です。キーワードになっている「社会性」ですが、それはただ単に社会と自分との距離を表出するだけのものではなくて、詩歌に求めたい「社会性」は、自分という個を介した人間の更新、ひいては言葉による社会の更新です。見たことのない言葉と言葉の取り合わせや斡旋のなかに、批評しきれない、私の言葉では追いつかない、時には逆撫

でされるような詩句を読みたいというのが理想です。

——杉本さんはいかがでしょう？

杉本 そうですね。やはり選考委員長というのがいて、その人を中心に絞り込んでいく形でないと永遠に決まらなそうですね。だいたい選考会は、それぞれ一番推したい人がいても、全員の話を聞いて、意見を変えていったり絞り込んでいくしかないと思います。どうしても曲げられないという場合もありますけれども。今日、私は皆さんのお話を聞いた上で、さいうさんでもいいかなという気持ちはあります、あと松下さんや常田さんでもいいし……。というように言っていると決まらない(笑)。まあ次回からですが、決め方についても考えたほうがいいかもしれませんね。どんな賞の選考も、やはり場が生き物みたいな気持ちはあります。

——俳句なら俳句、短歌なら短歌、現代詩なら現代詩という同じ土俵で絞り込んでいくのはイメージしやすいですが、口語詩句という多ジャンルの作品を多ジャンルの選考委員が評価するという時に、それがいかに可能なのかという悩ましさがありますね。選考委員長をどなたかにお願ひしたとしても、その人はその人でご自身のジャンルを持っているわけですし。

杉本 そうですね。だからやはり口語詩句とは何かということをそれぞれが考えながら、そこにふさわしいものに焦点を当てていく。

——西躰さん、いかがでしょう。

西躰 切実さという意味で長谷川さんのほうを推したと言いましたが、高橋さんと林さんお二方の話を聞いて、あえて今また家族像を立ち上げようとして

いるという意味では、さいうさんもたいへん切実なところで書いているのだと思えました。一点気になるのは、どなたかも言われたように、自己模倣というところですね。富田拓也(1979)さんが第一回芝不器男俳句新人賞に選ばれた時、江里昭彦(2000)さんが自己模倣の危険があると、エールを与えつつ評を書かれたことがあります(『鬘 TATEGAMI』十二号、二〇〇四年八月)、さいうさんにそれと同じような不安がないわけではない。ですから大賞に選ぶのであれば、そういう危惧も我々が指摘しておく必要があるだろうという気がします。書き続けていくのは非常にタフなことですし、さいうさんは作品のなかで、ちよっともろい感じが見えたりもします。

——ありがとうございます。では、この辺りで切りがいいように思います。あらためて多数決を採る必要もないかと思いますが、これでよろしいでしょうか。はい。では第六回口語詩句賞はさいうさんが大賞に決まりました。

奨励賞候補

——さて奨励賞のほうは、残り五名の大賞候補者が自動的に選ばれるわけですが、その他に、奨励賞候補に挙げられている一〇名(奎いう子・田崎森太・吉沢美香・玻璃・日下部友奏・suzsa・雲理そら・桜庭紀子・牛田悠貴・絵巻)のなかで、この人も奨励賞に加えるべきだというご意見があれば、引き続きそれも議論していただきたいと思います。今回から始まった選考方法では、やはり一人の選者が多くの投稿者のうちで一人だけを選ぶという点に大きな意味を見ているので、奨励賞の追加はあくまで、どうしても捨てがたいという方がいればという条件でお考えいた

だけたらと思います。

高橋 僕は田崎森太さん、頑張ってるなという感じがします。なんとか忌という、有名な芸術家や哲学者の忌日を詠んだシリーズは失敗しているのもたくさんあるのだけど、うまくいくと、すごくいいものが作れる人なんですよね。この方はたぶん独学で俳句をやっていて、すごく教養を感じさせるような言葉がふつと出てきたりする。しかも七四歳というお歳ですが、投稿数が二二六とずば抜けて多いでしょう。

立花 一時は毎日見ていました(笑)。

高橋 口語詩句の投稿者は若い方が中心ですが、この機会に田崎さんが受賞すると、口語詩句賞も広がりが出るように思います。

龍 私は、佳作に選んだ数で言えば、田崎さんはさいうさんの次に多いんです。それはやはり安定した質があるからですね。一つ一つ見ていくと、どうしても選んでしまうものがある。この人には差し上げてもいい気がします。

——奨励賞候補のなかで、票数としては吉沢美香さんと雲理そらさんが二票ずつ入っていますね。

林 吉沢さんは去年の新人賞ですよ。

高橋 僕が田崎さんを推す理由は、俳句をする方は皆さん、どこかの句会や結社に入ったり、あるいは「プレバト!!」(TBS系列)を見たりという感じだと思うのですが、この人はたぶん独学者、一人で俳句の本を読んで、勉強して、一人で自分のルールを作って、日々、業のようにやっつけてこられた。なんだこれはという作品もいっぱいありますが、でもその姿勢に関しては、僕はけっこう打たれますね。

林 すごくこだわって書かれていますよ。私は忌日

の句はほとんど採らないで、飛ばしてしまうんですけど(笑)。

龍 いや、私もそうです。

高橋 忌日の句でも、ジャンゴ・ラインハルト(1910-2003)というジプシー・ギタリストがいて、それはよかったです。「朝虹に葉脈弾むジャンゴの忌」/* Django Reinhardt】。

暮田 忌日の句で注記(年月日)はなくてもいいですね。忌日はウィキペディアとかで調べれば分かるので。忌日ではない作品を採ったことはあるのですが。

立花 一ヶ月の投稿数制限が七作になってからはぐっと少なくなりましたが、以前は複数の作品を同じモチーフにしている方も多くて、三作とも上句が一緒とか、自分のなかで決めきれないものをこちらに投げるような態度のものもありました。私、それはやはり許せなかったのですが、でも田崎さんの場合、試行錯誤されている。それをモチーフにできるのか実験したり、そこでよくなかったものはきちんとその結果を受け入れて、ある日ばたっと、また新たに始めている。それで新たに始めてから豊かになっっている。私は選評はまだ書いたことがないかもしれないですが、佳作で採ることは多いですね。今ほとんどよくなってきていますし、個人的に応援したかったので共感します。

林 最近おそらく奥さんを亡くされていますよね。だから毎月、月命日の句が出てきていて。

高橋 でも湿っていないんですよね。湿った情緒を持つてくると、「ちよっといい俳句」に収まってしまっただけで、すごくドライな感じがある。だから西洋的な教養を持つ人かもしれない。

林 何者かなと思いますよね。高橋さんが言われた

ように、俳句の結社とかそういうところで身につけた技術ではない、独特な技術があつて。

龍 きつと文芸ではないインテリですよ。

高橋 だから数学とか理学系の人だったりするのかなど。「向日葵の折れる形に祈る人」、これもよかったです。向日葵はウクライナとロシアの国の花。あからさまではないのだけど、この人はちゃんと見ている感じがしましたね。

龍 いや、もうシルバーの星ですよ(笑)。

——今のところ田崎さんのお名前しか出ていませんが、他の方はよろしいですか？

立花 私、絵巻さんを推していますが、この方はまだ作品投稿数が少なくて。これからもっと見たいですね。

暮田 絵巻さん、めちゃくちゃ面白いです。

立花 そうなんです。この人も何者なのか。ものすごく心に残る。今回は二〇作以上投稿があれば賞の対象になるので、絵巻さんも奨励賞の候補にしたのですが、でも大賞に推すにはまだあまりにも投稿数が足りないとも思ったんです。

やはりある期間で区切って作品すべてを読むものなかなか難しいですね。そのたぐさんのなかから私たちが作品を選ぶとなると、選考がより散らばりやすい。例えば二〇作なり三〇作なり、去年までのように自選で選んでもらえれば、今作者が何を見せたのか、意図も分かるのですが。

林 作者本人が自分で思い入れのある作品を選ぶと、逆になぜあれを入れないのかと疑問に思うようなこともありますね。結局、自分の作品ってけっこう読めないのです。

立花 それもそうですよね。

龍 しかし今度選んでみて分かったのは、数と質はほとんど比例するということですね。やはり数が多い人はいいものを書いている。

立花 少なくともほとんど当ててくる方もいますが、長く書いている方は安定感がありますね。

——では、もうご発言はよろしいでしょうか。いちおう決を採って、今お名前が挙がっている田崎森太さんを奨励賞に推すという方は挙手をお願いします。はい、全員ですね。では最終決定としては、第六回口語詩句賞の大賞がさいうさん、奨励賞が長谷川柗香さん、松下誠一さん、大嶋碧月さん、常田瑛子さん、奥井健太さん、それに田崎森太さんということになりました。

(記録制作 公益財団法人佐々木泰樹育英会)